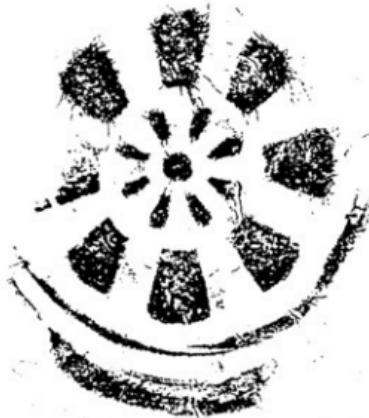


比江廃寺跡発掘調査概報



1 9 9 1 . 3

高知県教育委員会

比江廃寺跡発掘調査概報



瓦の出土状況（S区）



瓦の出土状況全景（同）

序

埋蔵文化財に対する関心の高まりは、年を追って大きくなりつつあり、このことは高知県においても例外ではありません。地域の誇る文化財や歴史的風物を大切に守ることは、県民自らが郷土を愛し、文化的で住みやすい故郷を主体的に育んで行く上で極めて大切なことです。高知県が重要遺跡確認調査や史跡整備事業を推進しておりますのは、歴史や伝統を単に過去の出来事として把えるだけでなく、掛替えのない先人の営みを歴史的教訓として学び、現代社会、さらに21世紀に向かっての私たちの果たすべき文化創造の糧として活用していくかなければならないと確信しているからに他なりません。まさに何を指いても不可欠な教育文化行政の一環であります。

本県における古代寺院の数は僅少であり、それだけに適切な保護あるいは史跡整備が急務であります。今回出土した10万余にのぼる古代瓦は、土佐古代史の解明に新たな視点を開くものであろうと思います。本書が広く皆様方に活用され、遺跡や歴史的風土の保存に一層のご理解を頂ければ幸甚に存じます。

最後に調査に御協力いただきました地元比江地区の皆様方や地権者各位に対しまして心より厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

高知県教育委員会 教育長

西 森 久米太郎

例　　言

1. 本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて、平成2年度に実施した比江庵寺跡発掘調査（重要遺跡確認調査）の概要報告である。

2. 比江庵寺跡は、南国市比江字土居屋敷265-3・256-10にある。

3. 今次調査は、平成元年度南国市教育委員会が確認調査を実施（調査員 森田尚宏、高知県教育委員会文化振興課主幹）し、その成果を受けて実施したものである。

4. 調査体制

調査員 出原恵三（高知県教育委員会文化振興課主幹）

調査補助員 中山泰弘

事務担当 堀川附夫（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班長）

5. 本報の編集は森田尚宏が行い、執筆は出原恵三が行った。

6. 遺構の測量にあたっては、昭和58年度に設置した公共座標第IV系による基準点を使用し実施した。標高は海拔高である。

7. 調査にあたっては、地権者新城東製紙株式会社の全面的な協力を得ることができた。また現場作業に従事して頂いた百田建設、地元比江地区の皆様に対して厚く感謝の意を表したい。

8. 発掘調査及び報告書作製にあたっては、下記の方々のご指導を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

岡本健児・岡本桂典・小田富士男・亀田修一・武末純一（敬称略アイウエオ順）

本 文 目 次

第Ⅰ章 周辺の歴史・地理的環境	1
第Ⅱ章 調査の目的及び経過	3
第Ⅲ章 調査成果の概要	6
1 S区の調査	6
2 N区の調査	17
第Ⅳ章 考 察	22

挿 図 目 次

Fig 1	周辺の遺跡分布図	2
Fig 2	調査対象地位置図	3
Fig 3	調査区位置図	4
Fig 4	S区瓦群・SK 1及びトレンチ配置図	6
Fig 5	S区トレンチセクション図	7
Fig 6	S区、SX 1出土状況	8
Fig 7	S区、SX 1出土の瓦	9
Fig 8	布目压痕の比較	11
Fig 9	軒丸瓦瓦当	
	T-I類(4.5・7~10) T-II類(11~13) H-I類(6・14) H-II(15) ...	12
Fig 10	軒丸瓦瓦当	
	H-II類(16) H-III類(17~23) T-III類(24・26) 重弁文軒丸瓦(27) ...	13
Fig 11	軒丸瓦瓦当 G-I類(28)	
	G-II類(29~32) K-I類(36・42~44) K-II類(33~35, 37~40) ...	14
Fig 12	平瓦及び鶴尾(57)拓影	15
Fig 13	N区北壁セクション	17
Fig 14	N区検出意向実測図	18
Fig 15	SK14・15及びSK20出土土器	19
Fig 16	SK20出土の砥石及びSK14出土の瓦質鍋	20
Fig 17	比江廃寺跡出土瓦編年試案	21

写 真 図 版 目 次

PL 1	調査前風景（西から）	26
	同 上（南から）	26
PL 2	S区瓦群（北から）	27
	同 上（西から）	27
PL 3	軒まる瓦出土状況	28
	作業風景	28
PL 4	瓦出土状況	29
	同 上	29
PL 5	軒丸瓦出土状況	30
	同 上	30
PL 6	瓦出土状況	31
	東西バンク北壁セクション、I層がII層を切っている部分	31
PL 7	S K14瓦質鑄出土状況	32
	N区完掘状況（南から）	32

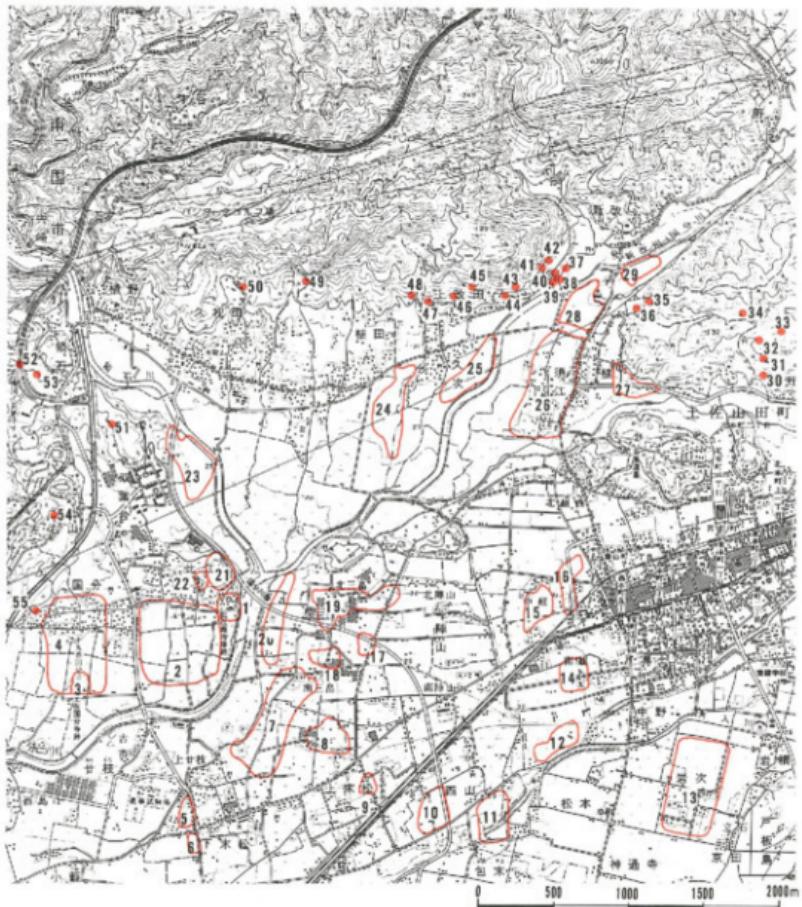
第一章 周辺の歴史・地理的環境

比江廃寺跡を含む周辺の地域は、土佐古代史の中心舞台であった。土佐国衙跡や国分僧寺を指呼の間に望み、承平4年国司の任を果たした紀貫之が都への進路に纏った『土佐日記』はあまりにも有名である。

比江廃寺跡は、高知平野の中心部を形成する南国市の北部、南国市比江字土居屋敷、北ヶ内にある。背後に標高49.7mの比江山があり、東に接して一級河川国分川が南流している。この国分川は、南へ500mの地点で長岡台地にぶつかり、前方に展開している沖積平野を包み込むようにして進路を西に転じ浦戸湾へ流れ込んでいる。比江廃寺跡は、中位上段丘（MⅠ面）を侵食して形成された中位下段丘（MⅡ面）の先端部に立地しているが、周辺の地形はMⅠ面から南に向かってMⅡ面、沖積低地、国分川氾濫原へと続いている。これら沖積低地の表層には火山灰を母材とした黒色腐植土層が堆積している。

比江廃寺に先行する時代の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡はほとんど不明であるが、弥生時代中・後期になると数多くの遺跡が存在するようになる。中期の遺跡は、国分川左岸の三島遺跡や国分寺遺跡群などで確認されているが凹線文盛行期から開始される例が多いようであり、比較的小規模な集落跡であることを特徴としている。後期になると遺跡数は飛躍的に増大し、わけても後期末から古墳時代初頭にかけては集落の規模もにわかに大きくなり、人口の増大と共に経済的に活況を呈するに至ったことを物語っている。

しかしながら、このような発展は、古墳時代の初頭をピークにして次の段階には受け継がれない。現段階においては、前期古墳は一基も確認されていないし、僅かに中期古墳の可能性を有するものが南国市岡豊町の狹山遺跡で認められているのみである。当該期の集落跡は勿論、土器散布地もほとんど不明な状況である。このような不可解な現象は比江廃寺跡周辺部のみでなく高知平野全体の一般的な状況である。このようないわば空白の時期が過ぎて、古墳時代後期になると当地域は再び活況を呈するようになる。まず北面する山麓には数多くの大小の円墳が営まれ、その数は消滅したものを含めると60数基を数え、県下最大の古墳群を形成するに至る。国分川右岸にある新改古墳（38）は、この地域では大型に属する6世紀代の古墳であり、幅2m、長さ5m、高さ2mを測る横穴式石室からは、金環や各種馬具・直刀などが出土している。これらの古墳を営んだ集落跡は、弥生後期末から古墳時代初頭の集落に重なるかたちで更に量的に拡大する傾向を示している。またこれらの山麓には、6世紀後半から7世紀以降数多くの須恵器窯が出現する。集落の拡大と古墳造営、須恵器窯の出現などは、生産力の拡大とそれに伴う首長層の政治的成長と不離一体の関係にあり、やがて8世紀以降の地方支配の拠点となることを保障する基盤がこの地域で醸成されつつあったことを示している。



%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期	%
1	江戸廻中塗	7-8世紀	5	山田二ツ又直跡	古墳-平安	29	須原神社直跡	古墳-平安	43	鬼ヶ谷一今塗	後醍醐天皇	2
2	土佐御月塗	西晉-平安	6	山田三ツ又直跡	古墳-平安	30	鶴ヶ谷古塚	後醍醐天皇	44	鶴ヶ谷古塚	ア	2
3	土佐圓分今塗	ア	7	木造	ア	31	鶴岡	ア	45	鶴村真古塚	ア	2
4	土佐圓分今塗跡	済生-近世	8	櫛塗	ア	32	宇津	ア	46	次郎ヶ谷	ア	2
5	佐渡丸真古塚	ア	9	三島	ア	33	猪俣窯	ア	47	西久保	ア	2
6	山田石原塗跡	済生-中世	10	木ノト	ア	34	深堀	ア	48	幡ヶ岡	ア	2
7	三添	済生-近世	21	上江戸城跡	中世	35	タシガニ瓦跡	7-8世紀	49	高松	ア	2
8	木ノト	古墳-中世	22	紀伊宿跡	元-後	36	タシガニ瓦塗	後醍醐天皇	50	小山裏	ア	2
9	三反塗	ア	23	上岡城直跡	古墳-平安	37	猪俣	ア	51	曾根原	ア	2
10	野村丸	済生-中安	24	ハザマダ直跡	古墳-平安	38	猪俣2号塗	ア	52	ロイノウ塗	ア	2
11	金塙	ア	25	御園神社	ア	39	猪俣3号塗	ア	53	牛久見	ア	2
12	松原丸	赤食-平安	26	三江二ツ又直跡	古墳-近世	40	猪俣4号塗	ア	54	左右山	ア	2
13	大沼	ア	27	西クレドリ	ア	41	梅山2号塗	ア	55	圓分大塚	ア	2
14	東白月	赤食	28	浜北	ア	42	1号塗	ア	56	ア	ア	2

Fig 1 周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の目的及び経過

比江庵寺跡は、7世紀後半から8世紀代にかけて営まれた寺院跡であり、唯一現存する塔心礎部分は昭和9年に国指定史跡となっている。古くから古代瓦が出土することが知られており、郷土史家の注目するところとなっていた。また昭和17年に塔心礎の東に隣接して製紙工場が建てられた時に多量の瓦が出土したと言われている。現在高知城懐徳館に納められている瓦は、その時に拾われたものの一部である。

比江庵寺跡が、考古学の方法によって本格的に発掘調査されたのは昭和44年のことである。塔心礎に接して西側部分に4個のトレンチを設けて調査を実施しているが、その成果について岡本健児氏は、塔心礎は創建時から動いていないこと、塔基壇は38尺4方を測ること、伽藍配置は法隆寺式が考えられることなどを挙げている。次いで平成元年に南国市教育委員会によって工場跡地となった東側部分の確認調査が実施されたが、礎石など寺院に直接関連する遺構を検出するには至らなかった。しかし調査区南端、塔心礎より東へ33mの地点で瓦溜の一部ではないかと考えられる凹地が検出された。今次調査は、この瓦溜状の遺構の広がりと北部の未調

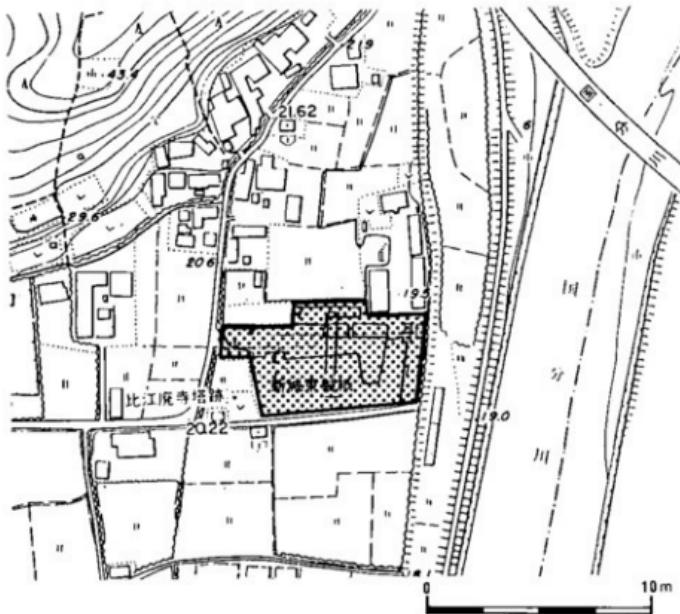


Fig 2 比江庵寺跡位置図



Fig 3 調査区位置図

査部分についての状況を確認し、今後の遺跡保存のための基礎資料を得る目的で実施した。

調査の便宜上、南側の調査区をS区(600m²)、北側の調査区をN区(150m²)とした。S区は、製紙工場建設や水田化の時にかなりの削平と擾乱を受けており、N区に比べて1.5~2mの段差がある。また工場床面のコンクリートや鉄筋入の基礎が随所に見られる。コンクリートを剥ぐとその直下が黄褐色シルトの基盤層となっており、遺物包含層は全く残っていない。本来の遺構検出面も数10cmの削平を受けていると考えなければならない。

第III章 調査成果の概要

1. S区の調査

(1) 瓦群の堆積状況

工場床面のコンクリートを剥ぐと直下から黄褐色シルトの基盤層が広がっており、随所に大

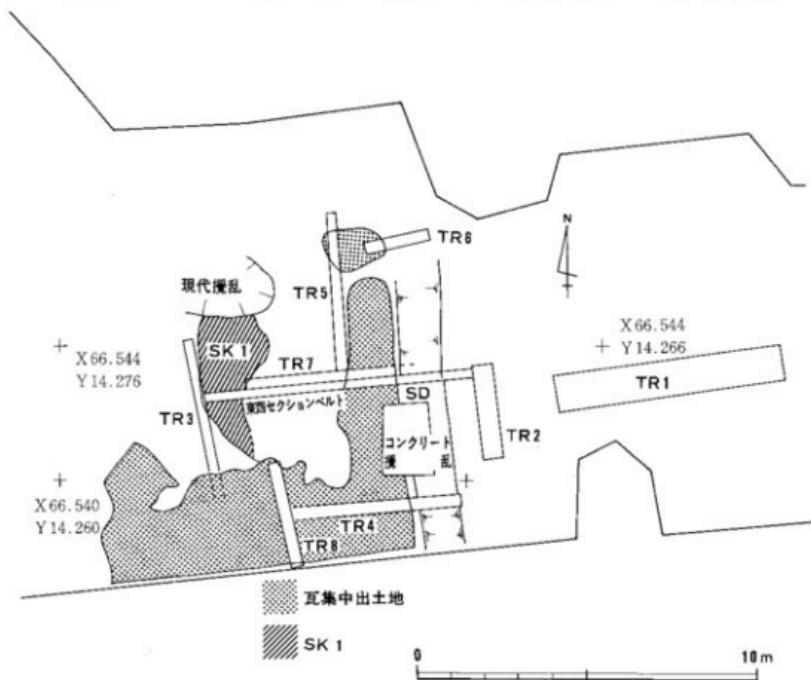


Fig 4. S区瓦群・SK 1及びトレンチ配置図

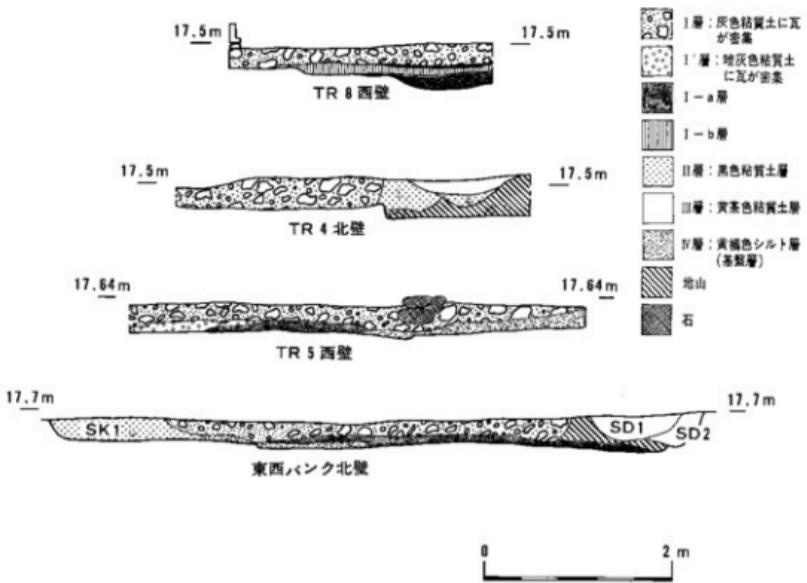


Fig 5. S区トレントセクション図

小の搅乱坑が存在している。調査区の西よりで、東西9m、南北3.5mの幅に瓦が密集して出土した。この瓦群は、出土状況から調査区外に南へ広がる状況を示しており、東端では1.7mの幅で北に8m前後伸びている。瓦群の東に接するかたちで1.2m幅の溝が直線的に南北に伸びている。瓦群の東端とこの溝をコンクリート基礎が切っている。瓦群の堆積の深さ及び性格を明らかにするために7個のトレント (TR 1~TR 7) を設定した。また中央部に東西方向のセクションベルトを残した。

次に瓦の堆積状況と溝との関係を東西セクションベルトとTR 5、及びTR 4の断面図から見てみよう。(Fig 5)

東西バンクセクション北面：斜めに立ち上がる西壁から1.25mのあたりまで、黒色粘質土(II層)の堆積が見られる。II層は、N区の遺物包含層を形成する土層であり火山灰を母材とする黒土である。周辺地域においても弥生～古墳時代の遺物包含層や遺構埋土を形成している層準で広範囲に分布している。II層中より少量の瓦が出土している。このII層は、I層によつて大きく切られている。このI層には多量の瓦が間隙なく詰まっており瓦群の大部分はこの層準に属している。セクションベルト東端で溝の断面を確認した。平面では1条と思われたが断

面で見ると2条が切り合っている。新しい方をSD1、古い方をSD2とする。両者は西の肩でII層を切り込み、東の肩では黄褐色シルトの基盤層を掘り込んでおり、埋土は黄褐色シルト層を主体として黒色粘土や灰色の粘土がブロック状に入っている。溝からの遺物は全く認められないので時期は不明であるが、工場建設に先行して存在していた溝であったことには間違いない。

またI層の下には、黄茶色粘質土(Ⅲ層)が薄く堆積しているが、I層との関係やその性格は不明である。遺物も全く存在せず時期もわからない。

TR5西壁のセクション：北側から瓦の詰まったI層が緩やかに傾斜しながら基盤層を掘り込み南に向かって深さを増大させている。南端では30cmの厚さである。北端より約2mの地点に人頭大の河原石が3個以上積まれているが、石の上面にはコンクリートが付着していることから工場関連の基礎石として置かれたものである。I層は南端部で埋土の多少の変化によってI'層と分けたが、I'層にもI層同様に瓦が詰まっており先後関係はないものと考えられる。当セクションにもI層下にⅢ層の堆積が見られるがその性格は東西バンクセクション同様不明である。

TR4北壁のセクション：東から溝が掘り込んでいるが、この断面では1条のみでありSD1かSD2かいずれとも決し難い。しかし掘り込みは東西バンクで見たように東肩が黄褐色の基盤層を西肩がII層を切っている。溝の30cm西から瓦の詰まったI層がII層を切って埋積している。またII層は、東に向かって斜めに立ち上がっていることが確認できる。

TR8西壁のセクション：セクションの南端は、工場敷地の南端部にあたりコンクリート下のくり石やコンクリート壁が置かれている。瓦の詰まったI層はくり石に接して厚さ30cm前後で堆積しておりその下に灰黒色粘土層(I-a層)と濃茶色粘土層(I-b層)がある。更に下層の凹地にⅢ層が見られる。

(2) 瓦群の性格

この瓦群が

ら出土した瓦
は、10万点近
くにのぼる膨
大な量であり、
数10点の須恵
器片や土師器
細片が一緒に
出土している。
次に以上の断
面観察をもと
に瓦群の性格
を明らかにし

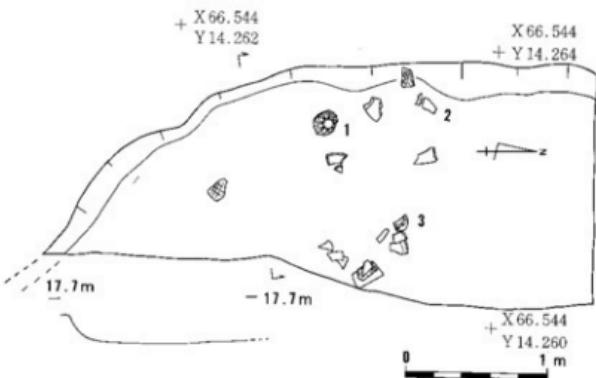


Fig. 6. S区, S X 1 瓦出土状況

ければならない。瓦の出土する層位は、I層とII層である。II層は、西端部の一部と溝の西側に存在し、瓦は西端部のみから軒丸瓦の瓦当を含む破片が少数出土している。II層は、先述したように弥生～古墳時代の遺構埋土として一般的な土層であることから、後世の搅乱などによる堆積ではないと考えられる。また西端の立ち上がりやTR 4北壁で確認できた立ち上がりによって人口的に掘られた東西幅6.5m前後を測る広い凹地状の土坑であったと考えられる。北側は現代搅乱に切られ南は調査区外に出ており全体のプランは不明である。ただ西端の肩が弧状をなしていることと東の肩が溝から東に出ていないことから、東は比較的直線的なラインを有している可能性があることから半円状の平面形を呈する土坑であった可能性がある。出土した瓦の年代とほぼ同時期に掘られた土坑（SK 1）としたい。

次にI層に堆積した瓦について述べる。I層は、II層を切っており、その堆積は、間隙なく敷詰められた状況を呈している。また時代の下る木材片や鉄金具状のものも出土しており、後述する瓦の年代とは全く異なる時期に集中して捨てられたと考えざるを得ない。全くの二次堆積である。そしてTR 8のI-a・b層などと共に埋積したものと考えられる。しかもそれはS区が削平された後の行為と考えられることから、I層の瓦は昭和17年に製紙工場が建設された時にコンクリート床のくり石変わりに埋められた瓦と考えられる。このことは周辺地域に住む古者の証言とも一致している。工場建設の際に塔心礎東から大量の瓦が出土しているが、その一部を拾ってくり石がわりに使用したものである。

(3) SK 1出土の瓦 (Fig 7)

埋土中（II層）より瓦当 1 を含む10数点の平瓦と鶴尾片 3 が1点出土している。1は単弁8

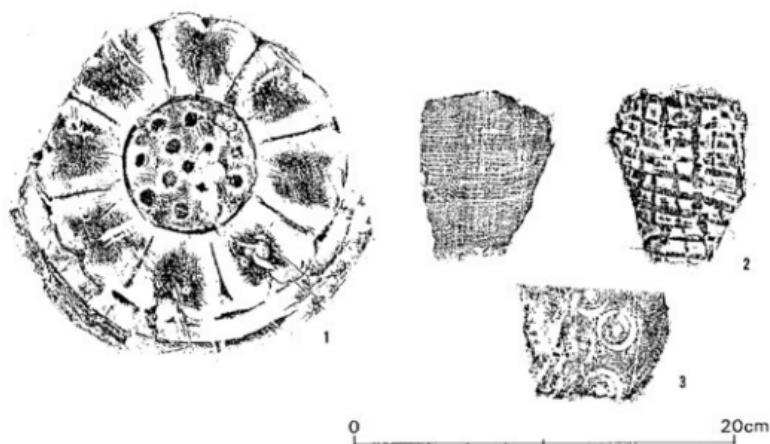


Fig 7. SK 1出土の瓦

葉蓮華文軒丸瓦である。弁区よりやや突出した中房に $1+4+8$ の蓮子を配している。弁には隆起があり弁間は稜線によって画され、弁の先端はハート状の切り込みがみられる。2は平瓦で凸面に格子の叩き、凹面に布目压痕がある。3は鴻尾の一部で刺突と周環で文様を施している。

(4) 瓦群 I 層出土の瓦

先述のように I 層出土の瓦の量は膨大であり、整理作業は僅か数%の先済が終わったにすぎない。ここでは、ごく一部の瓦を紹介するにとどめ、将来整理作業が完了した段階で改めて報告することにしたい。

① 軒丸瓦 (Fig 9・10)

④ 単弁蓮華文軒丸瓦 (4~13, 24~26) :すべて 8 葉蓮弁であるが諸特徴によって大きく次の 3 つに分けることができる。T-I 類 (4・5, 7~10) は、花弁幅が広く、ふくらみが見られる。間弁は独立せず鋭い稜線をもつ界線となって蓮弁のまわりを巡る。中房は大きく弁区よりやや突出し、例外なく $1+4+9$ の蓮子を比較的整然と配する。周縁は、完全に残っている例がないが 2 cm 以上の高さを有し線描鋸歯文が巡る。SK 1 出土の 1 も本類に属する。これらはすべて同范である。T-II 類 (11~13) は、弁幅は狭くなるが隆起が更に著しくなる。間弁は T-I 類と同様に界線となって蓮弁のまわりを巡る。中房はやや突出するが蓮子の状態が明らかなのは 12 のみである。12 は蓮子を $1+6+9$ に配し蓮子のまわりに巻線が巡る。13 は蓮子のみでなく全体に磨耗が激しい。範の消耗によるものであろう。

T-III 類 (24~26) は、前者に比べて瓦当直徑・厚さ共に小さくなる。断面隅丸方形の突線で蓮弁が描かれる特異な例であり、小さい中房内に 1 顆の蓮子を配する。25・26 は、1 つの弁のみに紡錘形の単弁を配している。これらの 3 点は同范関係にある。

⑤ 複弁蓮華文軒丸瓦 (6, 14~23) : これも 8 葉蓮弁であるが諸特徴によって大きく 3 つに分けることができる。H-I 類 (6, 14) は、中房から細い子葉が出ており弁の先端は僅かに凹みが見られる。間弁は中房に達せず三角形状を呈する。中房はやや突出し $1+6+8$ の蓮子を配する。周縁に唐草文を描くことを特徴とする。径・厚さ共に単弁の T-I 類に近い。

H-II 類 (15・16) は、子葉が大きく断面が隆起している。花弁は断面三角形の突線で描かれ、先端部は外方に突出している。間弁は H-I 類と同様で中房に達せず三角形状を呈する。中房は弁区より突出し周縁が凸状をなし、 $1+5+11$ の蓮子をやや雑然と配する。周縁は素縁である。

H-III 類 (17~23) は、一見細弁かと見紛う程に子葉が発達している。間弁は退化し弁の先端を巡る界線と化している。中房は弁区よりやや突出するタイプ (17, 20~23) と弁区と同じ高さを有するタイプ (18・19) があり、前者を H-III-a 類、後者を H-III-b 類とする。両者共に圈線により囲まれるものはない。蓮子は雑然と施され、表面は範の消耗により磨滅が著しい。

⑥ 重弁文軒丸瓦 (27) 他類に比べて径が小振りである。中央の 1 顆の蓮子を中心に内側には隆起した紡錘形の、外側には台形状に退化した花弁を配する。外区に 1 条の巻線が巡り、周辺

は丸味を帯びた素縁である。

② 軒平瓦 (Fig11)

③重弧文軒平瓦 (28~32)

4重弧文のG-I類 (28) と3重弧文のG-II類 (29~32) がある。28は硬質で須恵器の焼き上がりに似ている。蹄頭で凹面に模骨に使われた枠板の圧痕が明瞭に残っており、その幅は3cm前後である。凹面には布目圧痕が明瞭に残るが凸面の叩きはナデ消されている。29の弧文は深く描かれているが、断面三角形を呈している。また側縁は凸面側から斜めに削られている。布目圧痕や叩き目はナデ消されており、凸面の一部に丹が付着している。30の弧文断面は丸味を帯び31・32の断面は丸味を帯びた方形を呈す。31の凸面は格子の叩き、凹面は布目圧痕を残すが、先端より10cmのところから木理の荒いハケで強くナデつけられている。また側縁は29のように斜めに削られている。32の凸面は一辺1.5cmの斜格子の叩き、凹面は右から左へ強く削られている。

④均整唐草文軒平瓦

扁向唐草文は1点も見られずすべて均整唐草文で占められており、中心飾はどれも無果花状をなし内部に対向C字形を配する。唐草文も蕨手文が発達したものであるが、額の有無や瓦当の幅・製作手法などから3つに分類することができる。

K-I類 (36, 42~44) 素文の周縁部がつく。36は周縁の断面が三角形をなす。中心飾の両側にある対向C字形文様の位置が他のものよりも離れており、かつ上下逆に施文されている。42~44は、中心飾の中に対向C字形文を完全にとり込み、中心飾の斜上方に一対となって下向きの対向C字文がある。42と44の唐草文は3回反転目で周縁脇にぶつかり切れている。43は2回転したところで終わり周縁から蕨手が出ている。42~44は同範である。

K-II類 (33~35, 37~40) : 38以外は、浅頭を有す。33と35は上・下に素縁の周縁部を有するが、他のものは凹面側の周縁部がないばかりか唐草文様帶の上部が切れている。これらのうち37・38、40は瓦当の上縁を削っており、そのために文様帶が切れている。唐草文は蕨手が発達する点などはK-I類と共通しているが、K-I類に比べて瓦当幅がせまい。

⑤平瓦 (Fig12)

出土瓦の大部分が平瓦である。完形品は認められないが、ここでは凸面に施された叩き文様について見ることにしたい。最も多いのは格子目と斜格子の叩き目である。両者共に目の大さに大小が認められる。格子目の46は一辺5mm、50は3mm前後を測る。斜格子の例は一辺が8~10mmの47・56、5~6mmの45、5mm未満の48・51がある。この他平行叩きを不定方向に施す52~54などがある。しかし縦目の叩きは、N区の土坑内より1点出土しているのみでS区の瓦

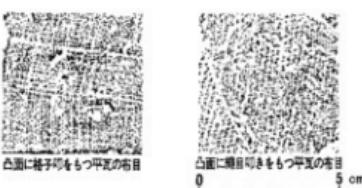


Fig 8. 布目圧痕の比較

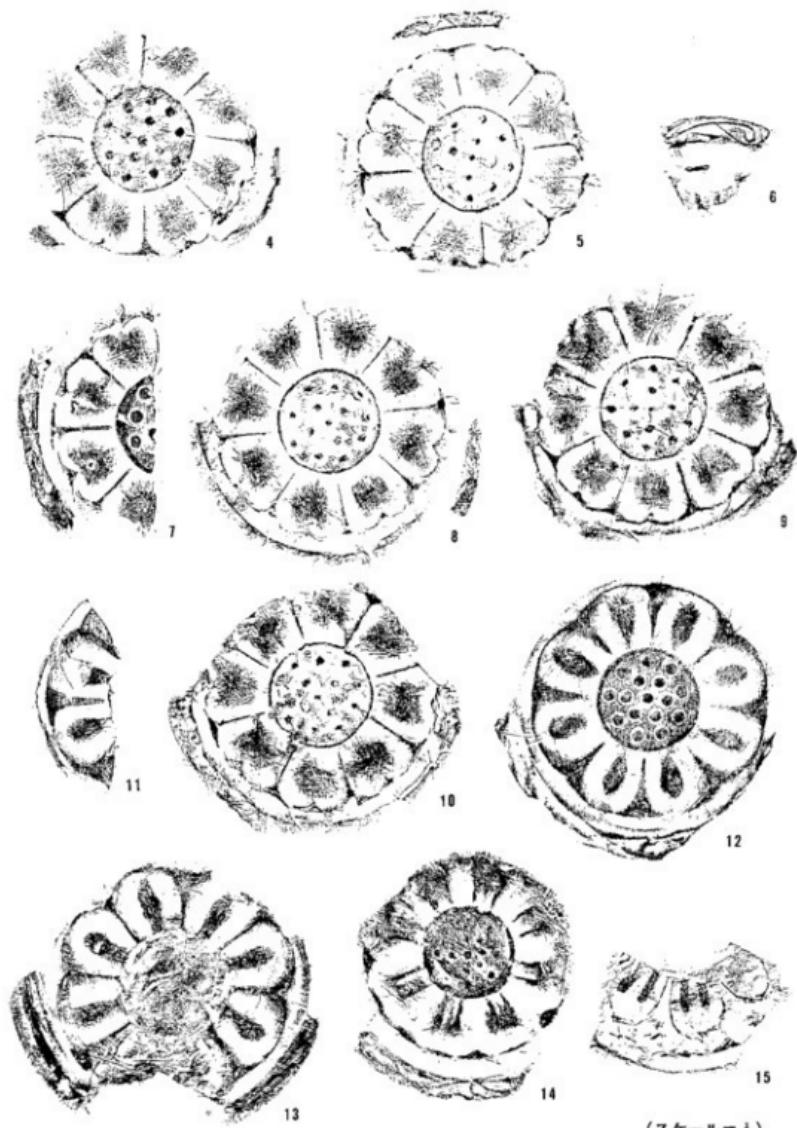


Fig. 9 軒丸瓦当 T-Ⅰ類 (4・5・7~10) T-Ⅱ類 (11~13) H-Ⅰ類 (6・14) H-Ⅱ類 (15)

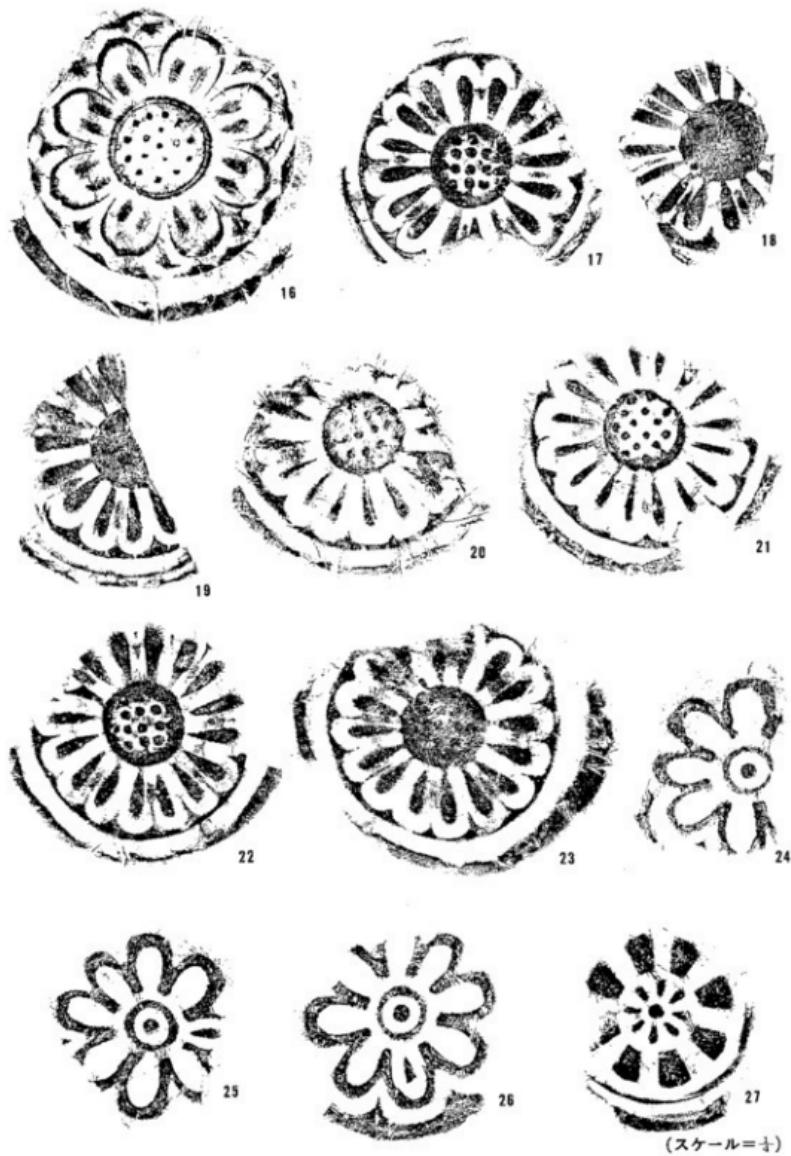


Fig10 軒丸瓦当 H-II類 (16) H-III類 (17~23) T-III類 (24~26) 重弁文軒丸瓦 (27)

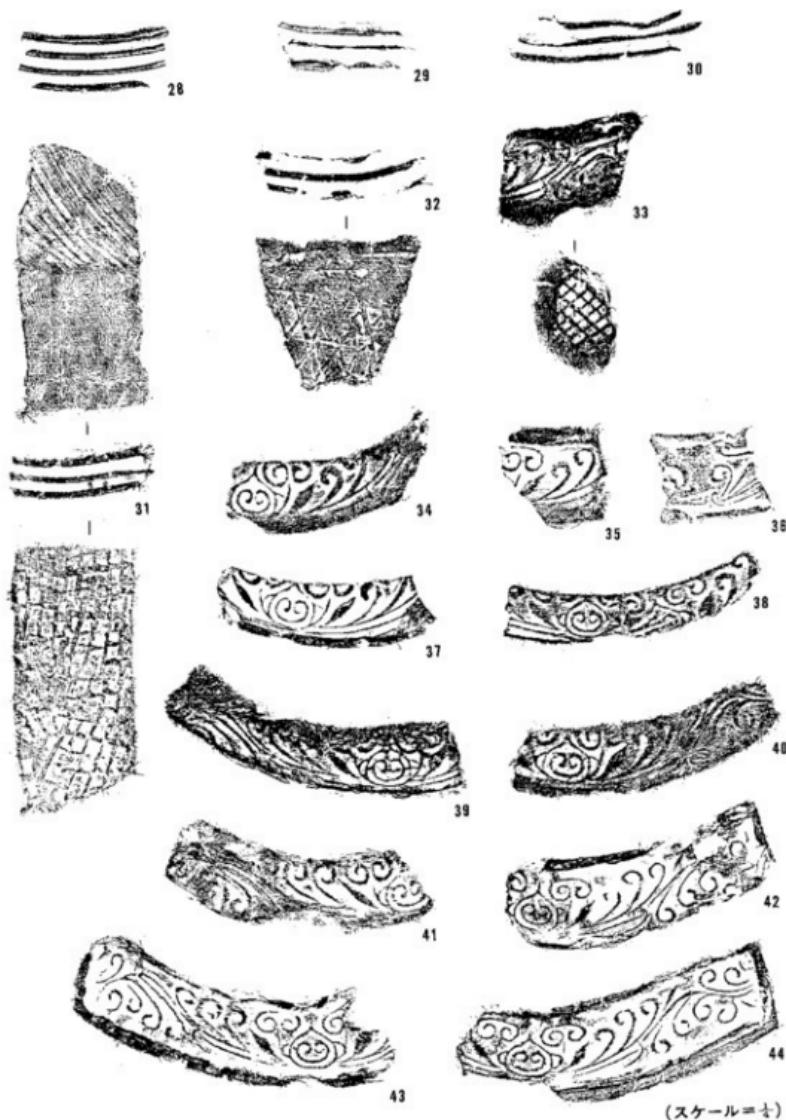


Fig11 軒丸瓦瓦当 G—I類(28) G—II類(29~32) K—I類(36・42~44) K—II類(33~35, 37~40)

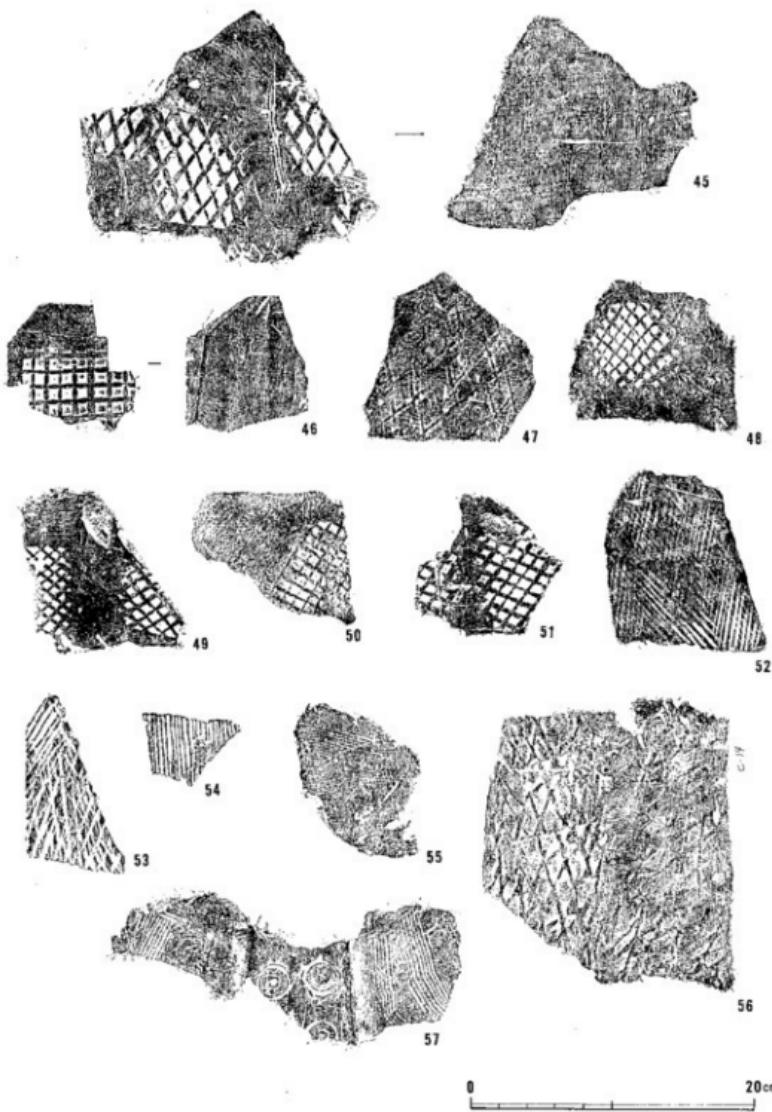


Fig12 平瓦及び鷲尾(57) 拓影

表-2 軒丸瓦法量表

() は推定 単位はcm

固版番号	直 径	内 区				周 縁				瓦当厚	
		弁 区		中 房		幅	形態	文 様	高 さ		
		運弁の型式	弁幅	径	運子数						
1 (19.0)	単弁 8葉	3.5	7.1	1+4+8	1.2	—	—	—	4.6	単Ⅰ類	
4 (21.2)	タ	3.8	7.0	1+4+9	1.1	—	—	—	4.0	タ	
5	タ	3.8	7.2	タ	1.1	平坦	素文	2.0	4.5	タ	
6	複弁 (8弁)	3.5	—	—	1.6	平坦	唐草文	1.3	—	複Ⅰ類	
7 (22.0)	単弁 8葉	4.2	—	—	1.1	タ	素文	—	4.6	単Ⅰ類	
8 (21.6)	タ	4.8	6.2	1+4+9	0.9	タ	タ	2.1	3.8	タ	
9 (20.4)	タ	3.7	7.2	タ	(1.1)	—	—	—	4.2	タ	
10 (19.5)	タ	3.8	7.4	タ	1.1	—	—	—	タ	タ	
11	タ	2.2	—	—	—	—	—	—	2.8	単Ⅱ類	
12 (20.6)	タ	2.0	7.4	1+6+9	1.2	—	—	2.4	3.8	タ	
13 (23.0)	タ	タ	(7.2)	—	1.8	—	—	—	—	タ	
14 (20.0)	複弁 8葉	3.7	6.3	1+6+8	1.7	平坦	唐草文	1.6	4.6	複Ⅰ類	
15 (21.4)	タ	3.0	—	—	1.0	—	—	—	3.9	複Ⅱ類	
16 (23.0)	タ	2.7	7.3	1+5+11	1.1	平坦	素文	2.6	3.6	タ	
17 (20.0)	タ	4.3	6.0	1+6+?	—	—	—	—	3.9	複Ⅲ類	
18	タ	3.8	タ	—	—	—	—	—	5.6	タ	
19	タ	4.3	タ	—	—	—	—	—	5.7	タ	
20 (19.0)	タ	タ	5.8	1+6+?	—	—	—	—	4.8	タ	
21 (タ)	タ	4.2	5.5	タ	1.2	—	—	—	5.3	タ	
22 (タ)	タ	3.8	5.7	タ	11	—	—	—	—	タ	
23 (21.5)	タ	3.7	タ	—	10~16	平坦	素文	1.5	4.8	タ	
24 (19.0)	素弁 8葉	2.7	3.7	1	2.0	—	—	—	2.2	単Ⅲ類	
25 (19.5)	單弁 8葉	10.2	3.5	1	—	—	—	—	2.7	タ	
26 (19.0)	タ	2.8	3.7	1	1	平坦	素文	—	—	タ	
27 (16.0)	重弁 8葉	2.1	—	1	1.3	丸線	タ	—	—	タ	

表-3 軒平瓦法量表

固版 番号	瓦 當 面					分 類
	(内区) 文様	厚さ	内区厚さ	周縁幅上	周縁幅下	
28 4重弧文	3.6					G I
29 3 タ	3.0					G II
30 3 タ	3.6					タ
31 3 タ	3.1					タ
32 3 タ	3.0					タ
33 均整唐草文	(7.0)					○
34 タ	5.2					○
35 タ	6.8	4.6	1.1	1.1		○
36 タ	6.4	5.0	0.6	0.8		×
37 タ	4.3~4.7	3.6~3.9	—	0.6		○
38 タ	3.6~3.1					○
39 タ	5.1					○
40 タ	5.6					○
41 タ	5.5					○
42 タ	6.3	4.4	1.1	0.8		△
43 タ	6.4	4.3	0.9	1.2		△
44 タ	6.8	4.2	1.0	1.6		△

群からは全く認められない。凹面にはほとんど例外なく布目压痕があるが、格子や斜格子叩目をもつものと縄目の叩きをもつものとでは、布目の糸の大きさが明らかに異なっている。格子や斜格子の例は糸が細く縄目のものは糸が太い。

④鶴尾 (Fig12-57)

鶴尾は、現段階で20点余り確認できているがどれも小破片である。57はSK1出土の3と同じものである。中央に稜線を有し厚さ1cm幅8cmの断面五角形の隆帯が縦に走り、隆帯上には径4~5mmの刺突と周環文様を配している。隆帯の両側は木目の粗いハケ調整が見られる。

2 N区の調査

(1) 基本層序 (北壁セクション Fig13)

I層：旧耕作土（現地表）

II層：黄茶色粘質土層（旧底土）

III層：灰黒色粘質土層（中世の遺物包含層）

IV層：黒灰

IV'層：IV層に黒色粘質土をブロック状に含む。

V層：淡茶色粘質土に1~4cm大的の礫を含む。

VI層：黒色粘質土層（S区SK1のII層に対応し弥生、古墳時代の遺物包含層）

VII層：淡茶色粘土層（無遺物層）

VIII層：黄茶色粘土層（ \sim ）

IX層：黄褐色シルト層（S区のIV層に対応、無遺物層）

N区北壁の基本層序は、IV・IV'・V・VI層で不整合が見られるが、Ⅵ層より下層は整合を保っており、全体として旧地形が東に向かって下降していることを示している。中世の遺構は本来IV、IV'、V層の上面で検出すべきところであるが、遺構埋土がこれらの層準と似るためにIX層の基盤層まで下げなければ明瞭に検出することができなかつた。

(2) 検出遺構と出土遺物 (Fig14~16)

N区では、弥生時代後期から中世に至る土坑を20基と中世の溝1条、ピット60数個を検出し、弥生前期から中世に至る土器・瓦・石臼など400点余りが出土した。こ

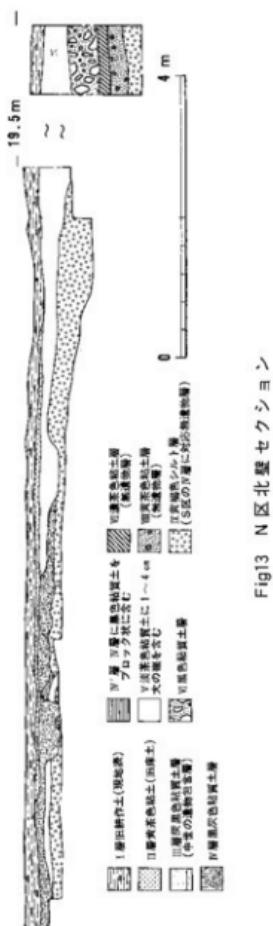


Fig13 N区北壁セクション

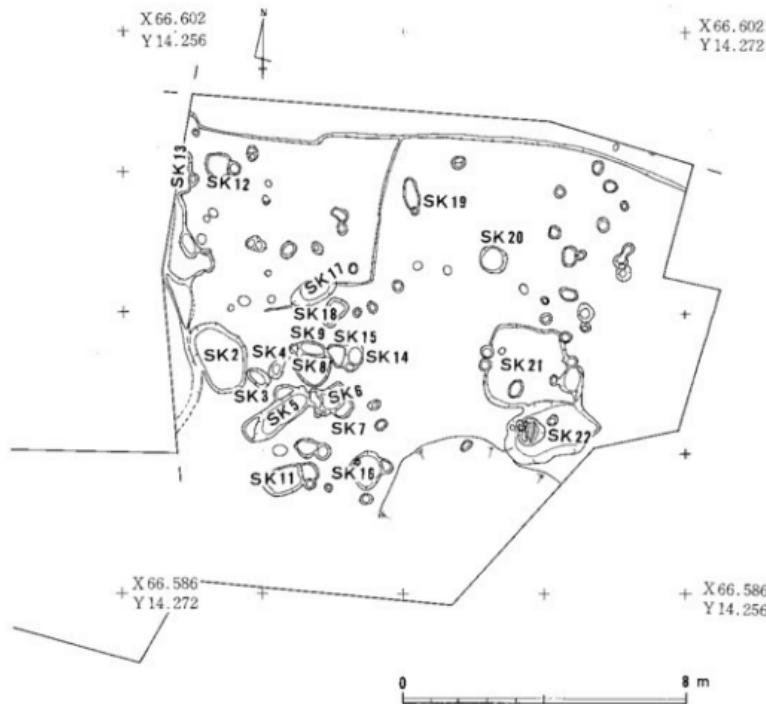


Fig14 N区検出遺構実測図

こでは良好な状況で一括遺物を得ることのできた弥生時代後期の土坑SK20と中世の土坑SK14について説明をすることにし、他の遺構・遺物については後日に期しい。

① SK20

長軸1.2m・短軸1.1m・深さ80cmを測る隅丸方形プランの土坑である。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がるが一部傾斜の緩くなるところがある。埋土はI層が黒褐色粘質土、II層は黒褐色粘質土中に多量の焼土・炭化物及び焼土塊が混入している。遺物はI・II層及び床面から完形土器を含む大小の土器片44点と砥石が出土している。58は、内面に稜を有して如意状に外反し口唇部には全面に刻目を施す。上洞部外面には多条沈線を7条まで確認することができる。外面は全面被熱赤変し煤けている。前期末の窓である。59・60・61は小振りの鉢である。59は尖底窓の底部から内湾気味に立ち上がり、端部は凹状にナデている。外面は叩き、内面はハケ調整後底部から指頭によるナデを施す。60は、いびつな形をしており平底の底部か

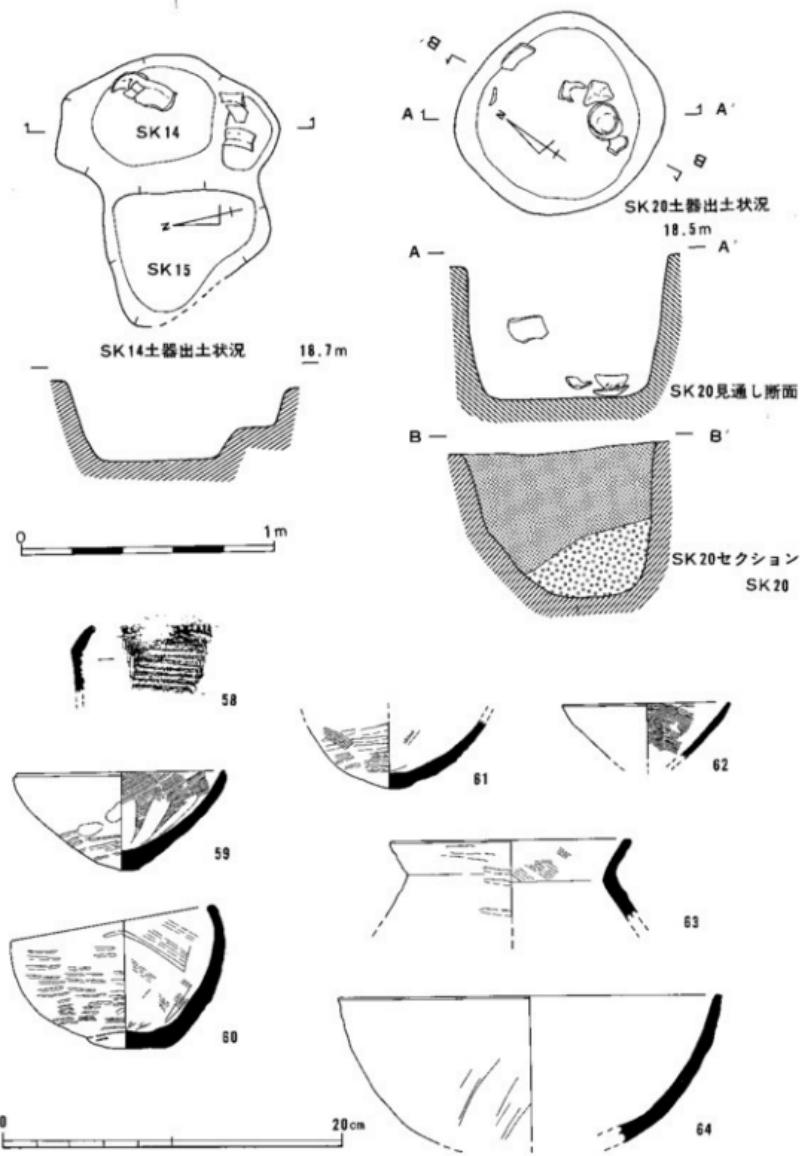


Fig15 S K14・15及びSK20 出土土器

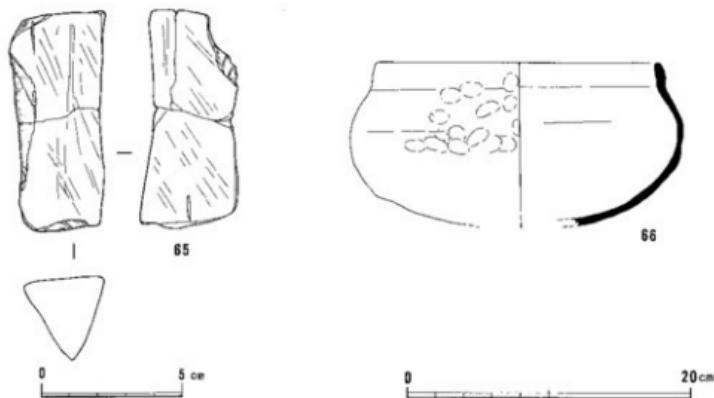


Fig16 SK16・SK20 出土の砥石及びSK14出土の瓦質鍋

ら強く内湾して立ち上がる。外面は水平の叩き、内面は左上りのハケ調整を行う。62は直線的に立ち上がり罐部は丸くおさめる。外面はナデ、内面は左上りのハケ調整。64は大振りの鉢である。半球形の体部を有し口唇部は面取る。外面はナデの上に部分的に棒状の原体による荒いカキ目状の痕跡が残る。4は尖底風の甕底部、外面は叩きの後に部分的にハケ調整を行う。63はく字状に外反する甕口縁部である。口縁部叩き出し手法による。内面は左上りのハケ調整を施す。61と63は同一個体の可能性が強い。58・62はI層から、59～61・64は床面及びその直上から出土し63はI層とII層からの接合土器である。砥石(65)は、凝灰岩製(87g)で全面に使用痕があり被熱赤変している。

②SK14

SK15と切り合っているが先後関係は不明である。135×75cmの不整楕円のプランを呈し、南端側が2段に掘り込まれている。床面までの深さは、46～40cmで北に向かってわずかに低くなっている。南壁側のテラスと東壁側床面から接合完形に近い瓦質鍋(66)が出土している。66は口径20.2cm、器高11.8cm、胴部中位で最大径23.6cmを測る。上胴部外面には指頭圧痕が顯著で外面は全面煤けている。

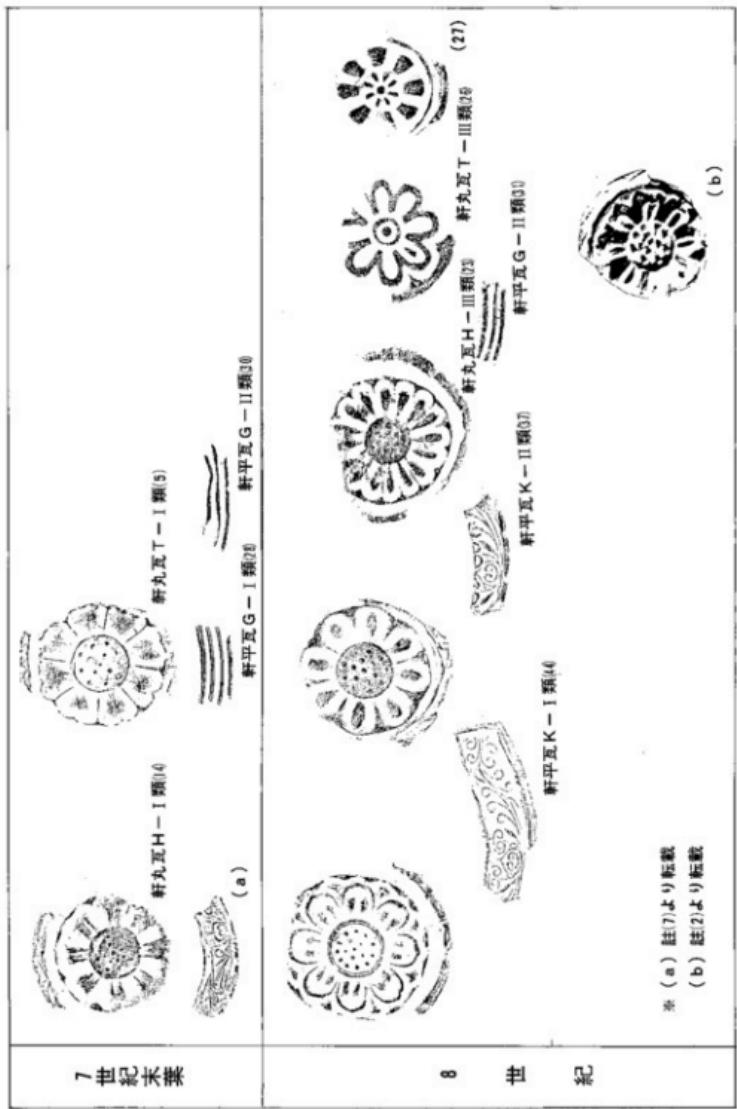


Fig17 比江庵寺跡出土瓦編年試案（縮尺不同）

第IV章 考 察

今次調査は昨年度に統いて塔心礎の東側（S区）とその北側（N区）について確認調査を実施したものであるが、残念ながら礎石など寺院に直接関係する遺構を検出することはできなかつた。今次調査によって塔心礎東側の製紙工場跡地内で比較的の残りが良いのではないかと考えられていた所についてはほぼ全面にわたって調査を行つたことになるが、この結果、北側の一部をのぞくと後世の開発行為や工場建設に伴う大規模な削平を受けており、寺院関係遺構が存在していたとしても、すべてと言ってよいほどに破壊し尽くされていることが明らかとなつた。僅かに当時の瓦溜の可能性のある土坑（SK1）の残欠が認められたにすぎない。しかしながら二次的な堆積ではあるが大量の瓦を得ることができたことは、これまで資料の僅少さから遅滞気味であった本県の古代瓦研究の進展を促進する上で大きな成果であった。以下瓦について若干の考察を述べることにしたい。すでに触れたように出土瓦の大半がまだ未整理の状態であり以下に述べることは予察的な性格にならざるを得ないことをお断りしておきたい。

軒丸瓦は、瓦当文様から単弁蓮華文・複弁蓮華文・重弁文があり、前二者はそれぞれ3類に分類することができた。単弁蓮華文軒丸瓦T-I類は、幅広く肉厚の花弁を特徴としており百済様式の系譜を引くものである。高知城懷德館に同様のものがあるがまとまって出土したのは今次調査が初めてである。T-II類は、子葉の発達が著しいのと蓮子に周環をもつことを特徴とする。T-III類は、前二者に比べると小振りであるが、厚い輪郭線で花弁を表現する独特の瓦当文を有し、中房円窓中に大粒の蓮子を1個配するなどの特徴から高句麗様式と呼ばれている⁽¹⁾。昭和44年の調査で同様の花弁をもちながらも、中房が大きく蓮子13個を配する瓦当(Fig17-b)が出土している⁽²⁾が同じ系譜上に位置付けることができよう。複弁蓮華文軒丸瓦H-I類(6・14)は、水平な周縁部に唐草文を配している。同様の内区文様をもちながら周縁に波文帯を巡らす例が報告されているが⁽³⁾、今次調査では認められなかった。H-II類(15・16)は、瓦当径が23cmと大型であり、花弁の先端が外方に尖ることや子葉の発達が著しいことを特徴としている。岡本健児氏や稻垣晋也氏によって法隆寺系軒丸瓦として位置付けられている⁽⁴⁾。H-III類(17~23)は、複弁蓮華文の中で最も出土量が多い。範の消耗が著しく中房の蓮子が完全に磨滅して見えなくなっているものもある。重弁軒丸瓦(27)は、今次調査において初めて出土したものであり2例が確認されている。文様の形態から統一新羅系の影響がうかがえる。以上述べた軒丸瓦については、瓦当文様のみならず範のあて方や丸瓦との接合方法など製作手法についても詳細な検討を加えなければならないが後日に期したい。ただこれらの中瓦はすべて文様が深く、周縁が垂直にかつ高く立ち上がり、周縁は水平面をなしている。従って瓦窓の押捺法としては、範を下に置いて粘土塊を詰め込んでいく「順次詰め込み方式」⁽⁵⁾がとられたものと考えられる。

軒平瓦は、重弧文と忍冬唐草文様とからなる。前者は4重弧文のG-I類(28)と3重弧文

のG-II類(29~31)からなる。土佐国分僧寺⁽⁵⁾や秦泉寺廃寺⁽⁶⁾から出土例が知られているが、後者の中には段顎形式の例や顎面に平行沈線を施す例が認められるが、本例は無顎形式であり平行沈線も認められない。また土佐国分僧寺や秦泉寺廃寺出土の例はすべて3重弧文であり4重弧文は認められていない。均整唐草文軒平瓦K-I類(36・42~44)は、從来から知られていたもので岡本氏や稻垣氏は単弁蓮華文軒丸瓦T-I類とのセット関係を考えており、過去に出土している法隆寺系軒平瓦(Fig17-a)の退化型式として把握している。

平瓦は、凸面に縄目の叩きを有する例が全く認められず、N区の中世溝(SD1)から混入の状態で出土した1点を見るのみである。すでに触れたように縄目の叩きを有する凹面の布目はS区出土の布目よりも明らかに太い糸が使われており目も荒い。縄目の叩きは国分僧寺や秦泉寺廃寺からも出土しており今後比較検討を加えなければならない。鶴尾は断面五角形の隆帯と周環内に刺突を施した文様を特徴とするもので秦泉寺廃寺から同様の破片が出土している。

次に分類した各瓦の先後関係、軒丸瓦と軒平瓦との組合せについて型式的な側面から考察を進めたい。先学においては、軒丸瓦T-I類と軒平瓦K-I類を、また軒丸瓦H-II類と過去に出土している法隆寺系の忍冬唐草文軒平瓦(Fig17-a)をセットとして把握した上で、前者のT-I類とK-I類が、H-II類とFig17-aの組み合わせに後出するとしている⁽⁷⁾。軒平瓦におけるFig17-a→K-I類への変化は妥当なものと考えられるが、軒丸瓦T-I類とH-II類との関係については疑問をいだかざるを得ない。軒丸瓦T-I類について稻垣氏は、軒丸瓦H-II類が「換骨奪胎した形」⁽⁸⁾と述べているが、軒丸瓦T-I類は百済系に属するものであり秦泉寺廃寺出土の高匂麗的要素をもった百済様式の有稜線素弁八葉蓮華文軒丸瓦の系譜を襲う型式と考えられる。軒丸平H-II類は、同H-I類の変化発展したものと考えることができないだろうか。そして断面が半球状を呈するまでに発達した子葉の特徴を共有するところから軒丸瓦H-II類は同T-II類との共存関係が考えられよう。軒丸瓦T-III類(24~26)が同範囲にあることについてはすでに述べたが、同じものが国分寺からも出土しているが、やはり同範による製作であることは疑いない。T-III類は8葉の花弁中1つにやはり断面半球状の子葉が付けられている。軒丸瓦H-II・T-II類との共存が考えられる。そしてFig17-bに先行する。以上述べた各類の先後関係や組合せを図示するとFig17のようになる。この編年を実年代に当てはめると、軒丸瓦T-I、H-I類と軒平瓦G-I・II類が7世紀末、軒丸瓦T-II・T-III、H-II・III類と軒平瓦K-II類が8世紀代に属すると考えられる。従って軒丸瓦T-I、H-I類と軒平瓦G-I・II類及びFig17-aが創建時の瓦であり、他の瓦はその後の造営や改築などに使用せられたものであろう。

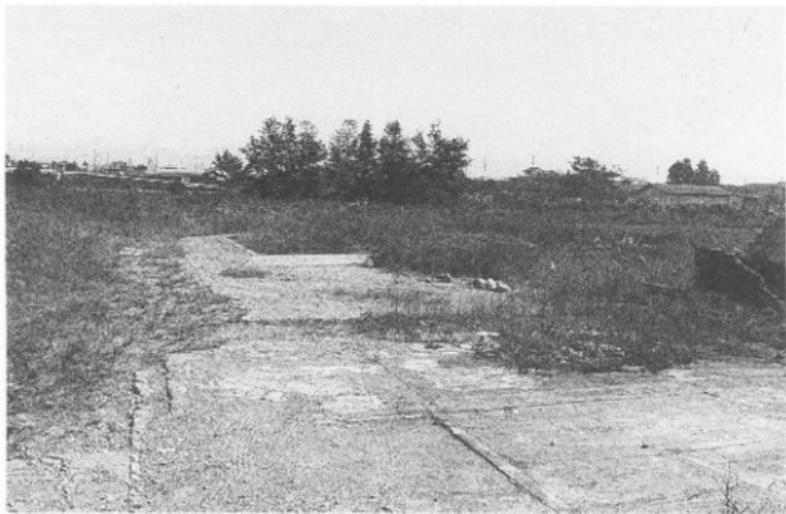
地方における古代時院の造営は、有力氏族の権威の象徴としてそれまで營まれ続けていた後期古墳に代わるものであり、政治的性格を濃厚に帯びていた。そして同時に土佐の有力氏族層と畿内の有力氏族や律令政府との諸関係の産物であり、瓦当文様にはその一端が投影されていたと考えられる。四国の他の3県においては、濃淡の差はあるにしても、この時期藤原宮式や平

城宮式の影響を受けた瓦当文様を有する軒丸・軒平瓦が存在しているのに対して、土佐においてはその影響が全くと言っていいほど認められない。8世紀代に至って地域色の濃厚な独自の変遷をたどっていたことが伺える。瓦当文様から見る限り土佐と畿内との関係は希薄な関係にあったと言わざるを得ない。少なくとも中央政府から積極的なインパクトや干渉はなく、逆に土佐からの強い中央指向の痕跡も認ることはできない。このことと高句麗系のT-III類や27のような統一新羅系の瓦の存在とは無関係ではあるまい。また在地氏族の政治的成長あるいはそれを支える経済的基盤に最も規定される側面が大きいのであるが、土佐の古代寺院の僅少さの要因とも関連があろう。畿内とのかかる諸関係は、他の政治的諸現象にも少なからず投影されていたに違いない。土佐古代史研究の前提をなすものであり、古代国家成立期における土佐の歴史的位置付けは勿論のこと、律令体制の構造的问题を内包しており同時にその問題を提起するものである。

註

- (1) 稲垣晋也「南海道古瓦の系譜」「新修国分寺の研究」第5巻上 1987年 吉川弘文館
- (2) 岡本健児・廣田典夫・西和彦『高知県比江廃寺塔跡』1970年 高知県教育委員会
- (3) 岡本健児『日本の古代遺跡』39 高知 1989年 保育社
- (4) 上原真人「瓦の見方について」「富山市考古資料館紀要」第3号 1984年
- (5) 岡本健児・廣田典夫・宅間一之『土佐国分寺鐘楼建立・書院改築に伴う発掘調査』1978年 国分寺刊
　　〃　　「土佐国分寺庫裡改築に伴う発掘調査概報」1979年 〃
- (6) 山本哲也『秦泉寺廃寺跡』1984年 高知市教育委員会
　　岡本健児・廣田典夫『秦泉寺廃寺』1977年 〃
- (7) (1)と同じ
- (8) (1)と同じ

図版



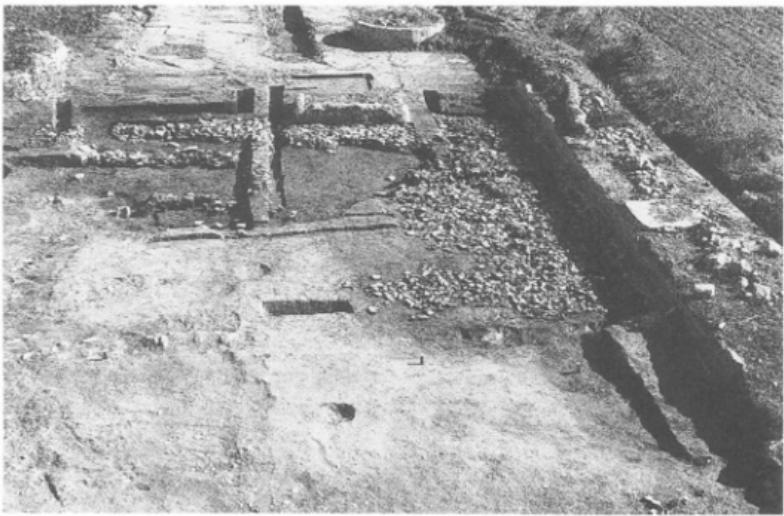
調査前風景(西から)



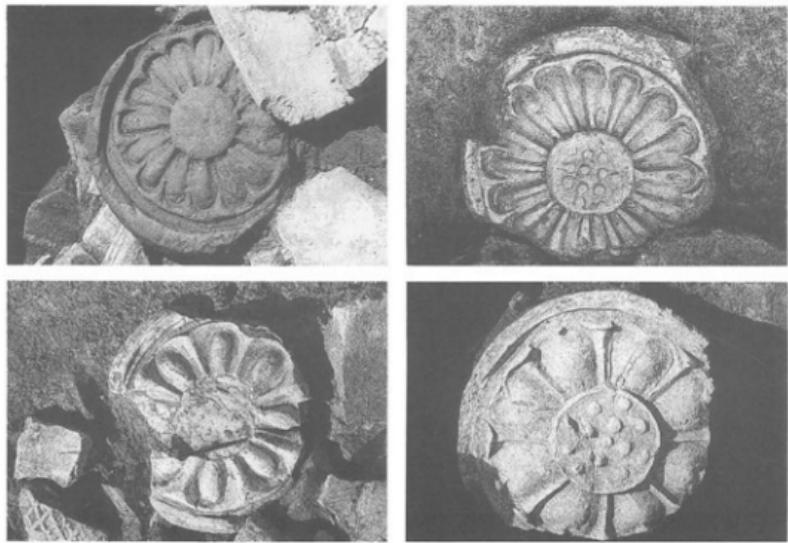
同上(南から)



S区瓦群（北から）



同上（西から）



軒九瓦出土状况



作业全景



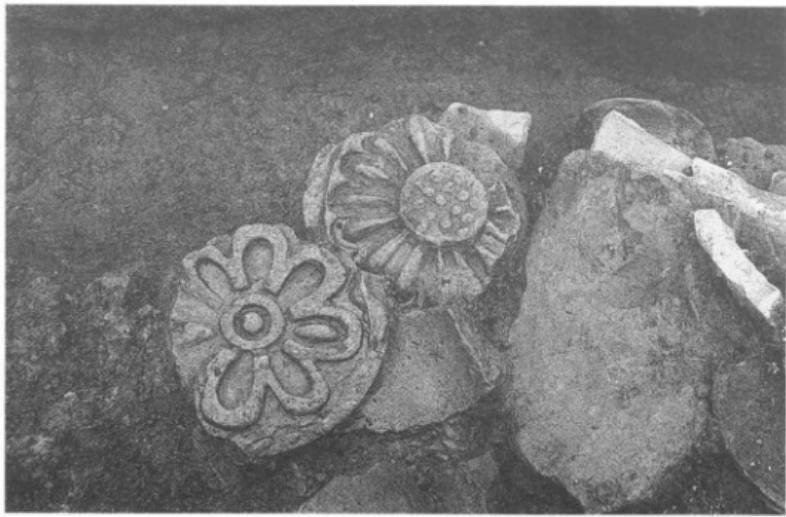
瓦出土状况



同上



軒丸瓦出土状况



同上



瓦出土状況



S区 東西バンク北壁セクション、I層がII層を切っている部分



SK14瓦質鍋出土状況



N区窯場状況(南から)

比江廃寺跡発掘調査概報

(高知県教育委員会埋蔵文化財報告書第33集)

1991年3月

編集発行 高知県教育委員会

(高知市丸ノ内1丁目7-52)

電話 (0888) 21-4761

印 刷 西村謄写堂